

木田市長の



「海外メディア歓迎晩餐会」

Vol.122



伊勢志摩サミットの開催まで、1週間あまりに迫った5月18日、鳥羽マルシェで鳥羽おもてなし会議主催の「海外メディア歓迎晩餐会」が開かれました。サミット開催を契機として、「鳥羽の食」料理人の技「海女文化」を世界へ発信するため、海外からメディアの方々を招へいして行われました。これまで様々なイベントを行ってきましたが、今回の事業ほど、終わった後の充実感が豊かなイベントはそんなにはなかったように思います。

12か国から20人のジャーナリストやブロガーを招いて、鳥羽のおいしいものを食べてもらいながら、和食の神髄や海女文化などを十分学んでもらいました。なぜ充実感が豊かだったかと言いますと、会場の設営をするスタッフ、料理を作る料理人、おもてなしをする女将、それにホスト役の来賓までもみんなが一生懸命であり、しかもそれぞれに素晴らしい出来栄えだったように感じたからです。私たちもてなす側の者たちでさえ、歓迎の気持ちがあふれていて関係者や見た目に素敵でそして繊細な料理に感激したくらいですから、海外からのお客様の驚きは想像に難くありません。事実、ワンダフル、美味しという言葉を連発していました。

それにしても和食は特別なものだと思います。当然私たちの体を維持するための食事という意味ではどの国の料理も同じですが、和食の場合はすでに芸術の域に達しているように思えてくるのは私だけでしょうか。このイベントは今後の効果という面で大変期待できるように感じましたので、最後のお礼のあいさつの中で、つい「毎年やりましょう」と言ってしまうから、このメディアを対象にした招へい事業を続けていけば、この地を訪れてくれる外国人観光客は間違いなく増えてくると思います。鳥羽の広告はそれぞれのジャーナリストのみなさんがやってくれるわけですから、費用対効果の面から言っても優れものと言えるでしょう。私たちの仕事はひとえにメディアの方々に鳥羽のことを気に入ってもらうこと、と言えます。

サミット開催により、そのメリットに喜ぶ人がいればデメリットに悲しむ人もいます。先日、賢島へ行ったら観光客の姿は殆どありませんでした。しかし、コンビニやガソリンスタンドでは売上が大きく伸びているそうです。悲喜こもごもと言えますが、一番大事なことはサミットが終わった後、一人でも多くの方が、サミットがあつて良かったと感じられることだと思います。そのためにこの事業は続けるべきだと思います。



Vol.149

〜被害者と加害者それぞれの立場〜
全国中学生人権作文より
……私が小学生の頃、遊びの中で、決して故意ではなかったが、友人に目のすぐ横を負傷させてしまった。私が加害者であるとの連絡を受けた母は、すぐに友人の家族に謝罪し、受診する病院に私を伴って駆けつけた。診察室から出てきた友人とお母さんにこれでもかというほど頭を下げ、謝罪をした。その後母は帰宅した父の隣に私を座らせてこの出来事を説明し、さだまさしの『償い』という曲の話を聞かせ、「もしA君が失明したら、あなたは必死で働いて、A君が本来ならば持っていた『見る』という権利を復活させるためにお金と時間を使いなさい。あなたが学生の間は

お父さんとお母さんが代わる。家族みんなでいろんなことを犠牲にして生きていかなきゃ」と話を聞かせる。週末、ずいぶん傷が回復したとの連絡を受け私と両親は改めて友人の家に謝罪に行くことになる。サッカーの練習の後、ユニフォームのまま行こうとした私を父が「着替える。お前がさせた怪我のせいでテニスの練習を休んだるA君の気持ちを考えろ」いつもは優しい父が厳しい口調で言った。この小さな気遣いも償いなのだ。その後、友人の怪我は治り、私の部屋には卒業式に彼と肩を組んで写った記念写真が飾ってある。あの事故は他人の権利を侵すことの悪と、たとえ過失であっても、自分だけでなく、家族や周囲まで巻き込んでしまう恐ろしさを私に教えてくれた。……

この作文を通して作者が犯してしまった過ちに気付き、償いの重さと家族に支えられて成長していく姿が感じられ、小学生としてはたいへんな経験と両親の支えによって乗り越えた思いが描かれています。感性豊かな中学生の作文は市立図書館で読むことができます。